日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

No.19 designated research

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/766

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

様式第５号（第７条関係）

令和　２　年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告書

整理番号	＃（　　） 奨励・指定	研究代表者氏名	石飛マリコ	職位	准教授

研究組織	氏　名	職　位	役割分担
	研究代表者：	准教授	石飛マリコ
	研究分担者：	教授	髙橋清美

研究課題名

うつ病患者の配偶者の体験と支援

研究実績の概要

（抄録程度の研究の目的、方法、考察、結果を記載してください。）

本研究は、うつ病患者の配偶者の体験を明らかにすることを目的とした。本研究を実施することで、体験内容やその体験に影響すること、また求める支援が明らかになれば、支援を検討するうえでの基礎的研究となりうると考えた。研究方法：研究デザインは質的記述的研究とした。研究対象者はうつ病で入院経験がある患者の配偶者とした。本研究は、日本赤十字九州国際看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。結果：対象者は２名で、本報告では１例を報告する。80 歳代男性、同居家族は妻(うつ病)、娘で、患者は初回入院だった。インタビュー時間 22 分 5 秒であった。5 つのサブカテゴリが抽出された。考察：精神疾患は表面的な異常がみえず、食事がとれない、睡眠がとれない現象が現れ、うつ病患者の状態を現実的な感覚で理解することは困難である。また、対象者は、初めての体験をしており、今後、回復そして再燃となり、病状悪化を繰り返すごとに諦めという感覚を抱いていく可能性がある。その時に対象者はさらに苦痛を抱く可能性があり、再燃した場合には、配偶者がどのように病気を受け止めているか、どのような不安を抱きはじめているのかを丁寧に把握し、対応していくこと、今後の見通しを説明することが必要であることが示唆された。求められる支援については、回復期では元通りになると予測しているため、関わり方や社会資源の活用に関して説明していくことが必要であることが分かった。

研究発表の方法　（大学紀要もしくは学会誌であれば誌名、ならびに投稿時期を記載する）

大学紀要へ投稿予定である。

様式第５号（第７条関係）

令和　２年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告書

整理番号	＃（18-1） 奨励・指定	研究代表者氏名	大重　育美	職位	教授

	氏　名	職　位	役割分担
研究組織	研究代表者：大重育美	教授	研究全般
	研究分担者：松中枝理子	助教	データ入力・分析

研究課題名

看護学生による大学生のための睡眠健康プログラムの開発のための研究

研究実績の概要

（抄録程度の研究の目的、方法、結果、考察を記載してください。）

【目的】

本研究は、看護職を目指し学ぶ看護学生と協働しながら、平成 30 年度から 31 年度までに大学生の睡眠の質を向上できる睡眠健康プログラムの開発を行うことを目的とする。

【研究概要】

本研究は、以下の 5 段階で進行する予定である。今回は、第 1 段階の申請である。

第 1 段階：睡眠調査（PSQI-J）（対象者： 1 ～4 年 400 名程度）

第 2 段階：第 1 段階で協力者を募り、その中から睡眠障害有無で各 5 名程度抽出

第 3 段階：第 2 段階の対象者に睡眠のセルフモニタリング、睡眠日誌の記載

第 4 段階：各学年 4～5 名程度を抽出し、グループデスカッションから睡眠健康プログラムに関する意見を集約

第 5 段階：大学生のための健康睡眠プログラムの完成

【方法】

第 1 段階：横断調査、A 大学各学年 100 名程度、計 400 名を対象とした。主に Web ページ（Google フォーム）を用いたピッツバーグ睡眠調査票日本語版アンケートを実施した。アンケートに参加する際、QR コードが必要なため、研究内容の説明書に掲示した。

第 2 段階～第 3 段階 : A 大学各学年 10 名程度、計 40 名を対象とした。第 1 段階のアンケートでセルフモニタリング、グループデスカッションに協力いただける学生については、学籍番号の記載を依頼していた。その中で協力いただける学生を対象とし、再度調査依頼を行い、各学年 10 名程度を確保した。研究デザインは、準実験研究である。対象者に対し、ウェアラブル端末心拍計 Fitbit リストバンド®を 1 機/名に貸出、1 週間手首に装着してもらった。機器から得られるデータとして 1 週間の日々の睡眠時間、夜間覚醒時間（分）、レム睡眠（分）、浅い睡眠（分）、深い睡眠（分）、平均心拍数、歩数、消費カロリーを記載してもった。自由記述として、睡眠 QOL を高めるための工夫、睡

眠時間を確保するための工夫などを尋ねた。
第 4～5 段階 : 第 1～3 段階の調査協力を得た対象者から、グループワークに協力可能と回答し、学籍番号を提示した学生の中から、各学年 5 名程度とした。 （本研究は、平成 30 年度からの継続調査のため、該当学年は 2～4 年生となる。）研究デザインは、質的記述的研究を行い、グループワークから睡眠健康プログラムに関する意見を集約した。

【結果】

全学年を対象とした調査結果から、回答を得た対象者数は 265 名であった（回答率 63.9%）PSQI-J の総合得点の比較から、2 年生の睡眠の質が最も低かった。2 年生は 3、4 年生より主観的な睡眠の質が悪く、1、3 年生より入眠時間に時間を要し、1、4 年生より日中覚醒困難を自覚する頻度が高かった。看護学生が良好な睡眠を確保するために取り組んでいる工夫として、28 サブカテゴリーから［起床時の工夫］等の 6 カテゴリーを生成した。

ウェアラブルを用いた結果として、対象者は 2 年生から 4 年生の計 29 名であった。全体の平均睡眠時間は、5.8 時間であり、学年別による差はなかった。睡眠ステージ別では、全体の夜間覚醒時間で平均 50.2 分であり、最長が 3 年生の平均 57.5 分で、最短の 2 年生の平均 44.7 分に有意差がみられた（$P<0.05$）。全体のレム睡眠は、平均 80.3 分であり、2 年生のレム睡眠が他の学年より少ないが学年別による差はなかった。全体の浅い睡眠は、平均 203.7 分であり、学年別の差はなかった。全体の深い睡眠は、平均 68.1 分であり，学年別の差はなかった。歩数は 4 年生が 2 年生より有意に多かった（$P<0.05$）。入眠時刻は、4 年生が他の学年より早く、起床時刻も早かった（$P<0.05$）。

【考察】

看護学生の学年間で睡眠の質が異なり、2 年生の睡眠の質が最も悪かった。本研究期間は2年生の専門科目の履修が多くなる時期であるため､予習復習や課題に時間を要し、睡眠に影響することが考えられた。また、看護学生は≪就寝時の工夫≫については様々な方法を用いて取り組んでいたが、≪起床時の工夫≫にはほとんど取り組んでいなかったことから、≪起床時の工夫≫について教育する必要がある。2 年生を対象に主観的な睡眠の質の向上、入眠時間の短縮、日中覚醒困難を軽減する方法を睡眠教育プログラムに組み込み、≪起床時の工夫≫について教育する必要性が示唆された。

各学年の睡眠時間は 6 時間未満と少なく、特に夜間の覚醒時間で 3 年生が最も長く、睡眠の質の悪化が危惧された。4 年生が他の学年より歩数の多いのは、同時期の履修科目が 2 年生や 3 年生より少ないことで活動量に影響していることが示唆された。

研究発表の方法 （大学紀要もしくは学会誌であれば誌名、ならびに投稿時期を記載する）

・タイトル「講義期間における看護学生の睡眠に関する横断研究－睡眠の質の学年間比較と良好な睡眠を確保するための工夫－」（筆頭著者：松中枝理子，日本看護学会看護教育，2020-11 抄録集掲載決定）

・タイトル「ウェアラブルデバイスを用いた看護学生の睡眠ステージの学年別比較」（筆頭著者：大重育美，日本看護学会看護教育，2020-11 抄録集掲載決定）

様式第５号（第７条関係）

令和２年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告書

整理番号	＃（ 18-2 ） 奨励・~~指定~~	研究代表者氏名	阿部　オリエ	職位	准教授

	氏　名	職　位	役割分担
研究組織	研究代表者：		
	研究分担者：		

研究課題名

臨地実習における看護系大学生のケア実施に伴う看護上の判断育成に向けた臨地実習指導者の関わり　－成人看護学（急性期）実習に着目して－

研究実績の概要

（抄録程度の研究の目的、方法、考察、結果を記載してください。）

Ⅰ．研究目的

本研究では、臨地実習における看護系大学生の看護上の判断を育成するために、学生と共にケアを実施している臨地実習指導者に焦点をあて、臨地実習指導者が、学生の行う受け持ち患者へのケア実施に伴う看護上の判断をどのように捉え、学生に関わっているのかを明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

研究デザインは、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的探索的研究である。研究参加者は、成人看護学（急性期）で実習指導にあたる臨地実習指導者とし、人数は 20 名程度とした。半構造化面接でデータ収集を行い、データ分析は、分析ワークシートを用い、データ収集と同時並行で進めた。

Ⅲ．結果

学生のケア実施に伴う看護上の判断育成に向けた臨地実習指導者の関わりは、ケア実施前の〈学生を患者理解に引き寄せたすり合わせ〉、ケア実施中の〈患者の安全を前提とした上での学生とのケア実施〉、ケア実施後の〈学生の意識化を促し患者の状態理解へとつなげていく〉というプロセスで示された。

Ⅳ．考察

学生の看護上の判断育成に向けて、臨地実習指導者は、学生が主体的にケアを実施することによって学ぶことができるであろう、ケア実施中の看護上の判断を予測して、ケア実施前から万全に整えるといった一連の関わりを行っていたと考える。一方、ケア実施後に臨地実習指導者は、学生に対して、患者の状態の可視化を行い、学生個々の知識と患者の状態を緻密

につなげていた。また、臨地実習指導者は、学生とケア実施を共有することにより、学生のケア実施に伴う看護上の判断育成に向けて、その時その場でインプットすべきことを見極めていた。このように、学生がケア実施に伴う看護上の判断を行う際、ケア実施前に臨地実習指導者は、ユニットの環境を熟知し、患者との信頼関係を構築している強みを活かしながら学生への関わりを行っていたと考える。

本研究の知見は、課題が多いとされている現在の臨地実習指導の中から描き出されたものであり、シミュレーションでは学ぶことができない患者への看護上の判断を育成するにあたっての指導モデルとして活用できると考える。

研究発表の方法　（大学紀要もしくは学会誌であれば誌名、ならびに投稿時期を記載する）

2020 年 12 月　第 40 回日本看護科学学会学術集会で発表予定
その後、学会誌投稿予定である。

様式第6号（第7条関係）

令和元年度　日本赤十字九州国際看護大学指定研究報告書

整理番号	#（　　） 奨励・指定		研究代表者氏名	大重　育美	職位	教授

	氏　名	職　位	役割分担
研究組織	研究代表者：大重育美	教授	研究全般
	研究分担者：衛藤 泰秀	助手	データ収集・研修企画
	山本 孝治	助教	データ収集・研修企画・論文作成
	小川 紀子	助教	データ収集・研修企画
	苑田 裕樹	講師	データ収集・研修企画
	西村 和美	准教授	データ収集・研修企画
	高橋 清美	教授	データ収集・研修企画
	姫野 稔子	教授	データ収集・研修企画
	田村 やよひ	元学長	オブザーバー

研究課題名

九州における大学発信型の災害看護対応システムの構築

研究実績の概要

【目的】

研究の目的は、被災地域で医療施設に勤務する看護管理者が体験した困難さとその対処について、被災後3年間の経過から明らかにすることである。これらにより、災害前から慢性期に至る看護管理者の役割の明確化、さらに看護管理者を対象とした災害教育に活用できる基礎資料となると考える。

【方法】

研究デザイン：半構成的面接法による調査研究

データ収集方法：各施設内の静穏な部屋を確保し、半構成的面接を行う。その際、研究協力者の許可を得てICレコーダーに録音する。

インタビューガイドの内容：熊本地震から3年後の看護管理者としてどのような困難さを抱えそれに対処しているかについて①困ったこととその対処②災害前に対策や予防策があったのか、その後の工夫や取り組み③現在までの新たな取り組みなどについて尋ねる。なお前回の調査と同対象施設については、2年後からの変化を中心として尋ねる

【結果・考察】

本調査は、2020年3月に実施予定であったが、新型コロナ禍のため、中止とした。

同様に、熊本地震において、震度5強を観測し被害が大きかった熊本県の阿蘇地方にあり、当時一部倒壊した施設で順次診療再開となった1施設に勤務している看護管理者を対象とした調査を予定していたが、中止となった。

研究発表の方法　（大学紀要もしくは学会誌であれば誌名、ならびに投稿時期を記載する）

・「看護大学における福祉避難所の開設に向けた可能性の探索―環境の変化と人体への影響

—」（筆頭著者：大重育美）日本赤十字九州国際看護大学紀要，18：23-30,2020.
・「熊本地震被災地域にある医療施設に勤務する看護師の心的外傷性ストレスの実態」（筆頭著者：黒田裕美）原著、日本赤十字看護学会誌掲載決定（令和 3 年 4 月予定）
・「災害拠点病院のない地域における ARCS モデルに基づく災害看護研修の試み」（筆頭著者：山本孝治）実践報告、日本赤十字看護学会誌掲載決定（令和 3 年 4 月予定）

【2019 年度に開催したイベント】
・「いざという時に動けるワタシになるためシリーズ」第 2 回開催（10 月 27 日 12：00-16：30，本学）
・第 20 回日本赤十字看護学会学術集会での交流セッション企画・参加（2019 年 6 月 15 日～16 日）（東京、日本赤十字看護大学）
・避難所運営に向けた宿泊訓練（10 月 9 日 18 時～10 日 AM８時）オ―ヴァルホール
【2019 年度の予定の内、コロナ禍で開催できなかった内容】
・親子で楽しむ災害の備えワークショップ（学生との共同企画、栄養士の協力もあり、2020 年 3 月 8 日予定）
・阿蘇地域の病院管理者への聞き取り調査（2020 年 3 月 18 日～19 日）